

— 特許検索競技大会 特別対談 —



次世代の特許調査人材

2016年9月



一般財団法人 工業所有権協力センター
Industrial Property Cooperation Center

次世代の特許調査人材



特許検索競技大会2015最優秀賞受賞者

一般財団法人工業所有権協力センター理事

尼崎浩史 × 向後晋一

企業の知財戦略において、特許調査が重要であることは勿論ですが、近年では、競争環境の激化や企業活動のグローバル化のさらなる進展などを受けて、単なる特許調査にとどまらず、より経営戦略に資する知財情報の提供が求められています。

そこで今、企業が求める特許調査人材とは何か。さらに、次世代の特許調査人材とはどのような姿なのか。

IPCCが主催する「特許検索競技大会2015」の最優秀賞受賞者であり、弁理士や中小企業診断士等の資格を持つ尼崎浩史氏に、IPCCの向後晋一理事が、今後の特許調査人材の深化の方向性についてお話を伺いました。

一般財団法人 工業所有権協力センター
企画室 事業推進部

(受賞の効果)

【向後】まずは、特許検索競技大会2015での最優秀賞受賞おめでとうございます。尼崎さんは過去の大会でもゴールド認定を受賞されていますが、大会にはいつ頃から参加されていますか。

【尼崎】2007年に開催された第一回大会から参加しています。当時は大阪だけの開催だったのですが、大変興味深い大会だったので、東京から大阪まで足を運びました。その後も毎回ではありませんが参加しており、IPCCさんが主催されるようになった2013年からは毎年参加しています。前回ゴールド認定を受けたのは2013年大会の電気・ソフト部門ですね。

【向後】今回の化学・医薬部門と合わせると2部門でのゴールド認定を達成されたわけで、あとは機械部門ですね。

【尼崎】そうですね。機械は苦手な分野なのですが、少し意識はしています。

【向後】そうすると、グランドスラムと言いますか、大会史上初の快挙となりますね。

【尼崎】最優秀賞授賞式のスピーチで、去年の流行語大賞の言葉を借りて、冗談半分ですが「残りひとつの機械部門もゴールド認定を取

ってトリプルスリーを達成したいと思います」と言ってしまいましたので(笑)。

【向後】是非トリプルスリーを達成して下さい。ところで、最優秀賞を授賞されてから、何か変化はありましたか。例えばクライアントとの関係が良くなったとか、ご自身の心構えが変わってきたとか。

【尼崎】まず家族が褒めてくれました。この大会に参加していることは以前から話しており、頑張っていることを理解してくれていたのも、受賞が決まった日は一緒に祝杯をあげました。また、クライアントのある人から、私が出版した本に「サインして」と頼まれたこともありました(笑)。

【向後】もう有名人ですね(笑)。

【尼崎】業界に知れ渡るといって効果があったように思います。知名度が上がったことにより、新規のお客様も増えました。

【向後】大会で受賞されたことで「この人に任せれば大丈夫」という信頼感が生まれたのでしょうか。

【尼崎】そうですね、それが1番大きいですね。大会に出場する皆さんのモチベーションのひとつに「大会で実力を証明する」というものがあります。この様な形で実力が認められて公



尼崎 浩史(あまさき こうじ)
インフォストラテジー特許事務所 所長
きさらぎ国際特許業務法人 パートナー
弁理士・中小企業診断士・検索技術者検定1級
特許検索競技大会2015最優秀賞受賞

表されれば、お客様からの信頼も厚くなりますから。

【向後】クライアント側も、大会の結果を、仕事を依頼する指標にしているかもしれませんね。

【尼崎】今回私は最優秀賞を受賞しましたが、参加者が285名もいた中で受賞できたことは運もあったと思います。まだまだ力の足りないところもあり、私なんかを受賞しているのかと思う気持ちもあります。

【向後】尼崎さんの実力ですよ。

【尼崎】ありがとうございます。お客様からの期待値も上がっているのです、受賞して逆に身が引き締まる思いです。

(大会の評価とその効果)

【向後】大会問題の難易度はいかがでしたか。物足りないところなどはありましたか。

【尼崎】毎年、よく考えられた問題が出題されていて、今回も制限時間いっぱいまでかかりました。残り5分で見直しをした時に大きなミスをつかみつけて慌てて修正しました。これがなかったら優勝できなかったと思います。気を抜くとゴールド認定すら取れないような非常に難易度の高い問題だと思います。出題者側はかなり工夫して作っていると感じます。

【向後】実は私も過去問集を入手して、問題を見たのですが、非常に難しいなと感じました(笑)。

大会問題の作成など、運営側へのご興味はありませんか。

【尼崎】まだまだ未熟ではありますが、もう一度優勝したり、トリプルスリーを達成したら考えたいと思います。

【向後】知識や経験、実力を兼ね備えた尼崎さんには適任だと思いますので、是非ご検討ください。

ところで、特許検索競技大会の存在をどのように評価されていますか。

【尼崎】先程もお話した通り、業界での知名度向上には非常に大きな効果がありますし、特許調査人材の育成という点においても、大いに貢献していると思います。まずサーチャーのモチベーションが非常に上がっていますね。団体戦も含め優勝したら名前が出るので、自分も名を列ねたいという人が大勢います。特に調査会社では、この大会のための勉強会や、団体戦の出場権をかけて内部で選抜試験をやっているところもあると聞いています。

【向後】そこまでやっているのですね。大会で優勝すると個人的に効果があるのは勿論のことですが、会社や業界全体にとってもインパクトがあるのでしょうか。そういった情報はなかなか我々主催者側には伝わって来ないので、お話を伺うと逆に張り合いが出ます。大会をやっていて良かったなと思います。

【尼崎】受賞のインパクトは大きいですね。あまり名前の知られていない調査会社がこの大会で上位に入って知名度が上がることもありますから。

【向後】大会の更なる発展に向けて、何か良いアイデアなどがあれば是非お聞かせ下さい。

【尼崎】ベーシックコースの設置や団体戦の導入、さらに去年は海外セクションを開催するなど、すでに色々な取り組みをされていますので、なかなか良いアイデアは思いつかないのですが、更なる海外展開というのは面白いのではないかと思います。こういった大会は日本特有のものなので、規模拡大という意味でも海外にも展開して、最終的にオリンピック的なものになると面白いと思います。今よりもっとモチベーションが上がるのではないのでしょうか。

【向後】それは面白そうですね。大会事務局へ伝えておきましょう。

(特許調査のやりがい)

【向後】以前は技術開発のお仕事をされていたと伺っていますが、知財の世界へ轉身した動機はどのようなものだったのでしょうか。

【尼崎】手に職をつけたい、何か資格を取りたいという考えから弁理士資格に興味を持ち、まずは調査会社に転職しました。当時は特許調査自体をあまりよく知りませんでした。やってみると非常に楽しく、自分に向いているなと感じました。

【向後】特許調査を行う上で、「この技術はすごいなあ」とか、「なんて面白いのだろう」とか、いわばキラキラした少年の目の輝きのような知的好奇心を感じることはありませんか。それがこの仕事において一番大事なメンタリティではないかと思うのですが。

【尼崎】他人の発明や、新しいものに興味が湧くのは大変重要なことだと思います。

「よくこういうことを思いついたなあ」と感心することはあります。

【向後】調査の仕事で苦勞された事例などはありますか。

【尼崎】調査の仕事は限られた時間内で行わなければなりませんので、「本当にあの報告でよかったのか」とか「調査漏れはなかったか」など不安になることがあります。報告後のお客様からの反応は、常日頃どんな案件でもとても気になります。

【向後】そういう感性は必要だと思います。「絶対検索漏れを許さない」という気持ちがないといい仕事はできません。IPCCのサーチャーもまさに同じで、持ち時間が限られている中でベストを尽くすとなるとなかなか大変です。例えば「検索でヒットした文献を全件見た」という場合でも、検索に用いる分類がそもそも間違っている場合は、検索結果に意味がありません。限られた時間内でいかに効率よくベストを尽くせるか、それがこの仕事の技量なのでしょうね。

【尼崎】本当にそう思いますね。100点の解答は得られないまでも、時間内で及第点の80点の結果が毎回出せるようなスキルを磨くことが大事だと思います。

【向後】そのようなスキルを磨くために、どのような研鑽を積まれていますか。

【尼崎】出願前の業務であれば、出願前調査をして明細書を書いて、その後拒絶理由の引例を出願前に行った自身の調査結果と見比べて漏れを見つける、というようなことをすることはあります。情報提供や特許異議申立用の調査でも同様に、調査した案件の経過をウォッチングしています。私の場合は一人で調査をしているので、自力で研鑽を積んでいかなければなりません。あとは対外的には、特許分科会やサーチャーの会といった会合に時折参加したりしますが、結局は自分で自分のスキルを磨くことが重要だと思います。

【向後】審査官の拒絶理由を見て自身の調査結果を評価するという手法はIPCCのサーチャーもやっています。また、自分の調査結果をクライアントがどう解釈するかということも重要です。

【尼崎】自分の中で主引例だと思っていたものがそうではなかったとか、審査官の結果を見ながら自身の調査結果を評価するのは良いやり方だと思います。

私の場合は個人ですが、IPCCさんのような組織の場合は、いかに個人個人が持っているノウハウを表に出し、共有化するかも重要だと思



向後 晋一(こうご しんいち)

一般財団法人工業所有権協力センター執行理事
元調査業務指導者
元特許庁審査長・審判長

います。これはとても難しいことなのだと思いますが。

【向後】そうですね。そこは我々にとっても課題の1つです。しかし、現実にはなかなか難しいところですね。

これまでの仕事の中で「これはやったぞ」といったやりがいを感じたエピソードはありますか。

【尼崎】無効資料調査の結果、とても良い文献が見つかって、お客様が良い条件で和解契約を結べた時でしょうか。そういったことを聞いたりするととてもうれしく感じます。なかなか企業さんからのフィードバックは少ないのですが、たまに「いい資料見つかってよかったよ」と聞くととてもうれしいですね。無効資料を探すのは宝探しゲームのような感覚ですね。

（次世代に向けた特許調査の深化）

【向後】尼崎さんは弁理士のほか中小企業診断士の資格もお持ちと伺っていますが、仕事全体としてはどのような配分ですか。

【尼崎】今の仕事は、配分でいくと特許調査が6割、権利化や鑑定などの弁理士業務が3～

4割、それ以外としては執筆やセミナー講師などもあります。それから、中小企業診断士としての仕事もたまにあります。

【向後】そのように様々なお仕事をされるということは、ご自身にとってプラスになっていますか。

【尼崎】出願系業務と調査業務にはもちろん相乗効果があります。自分で調査して明細書を作って出願するとか、調査して情報提供や異議申立をするとかですね。また明細書を作るというのは、発明を理解して文章を考えることなので、例えば、抽出した公報に記載された発明をすばやく理解したり、検索キーワードの同義語を考えたり、あとは侵害調査の場合は発明を権利化側からとらえるとか、そのあたりは非常に密接だと考えています。

【向後】中小企業診断士の方はいかがですか。

【尼崎】そちらの仕事はまだまだなのですが、以前自治体の仕事で、ある政令指定都市にある企業の知財活動を評価する業務のヒアリング担当として十数社を回り、社長さん達にそれぞれの会社の知財状況をヒアリングしたこと

【特許検索競技大会とは】

特許調査能力の客観評価と優秀者及び優秀団体の顕彰等を通して、特許調査に関する技術の普及啓発を促すことにより、我が国のイノベーションの促進に寄与することを目的として開催している大会です。本大会では初心者向けのベーシックコースと、上級者向けのアドバンスコースの2コースを設けており、一定レベルの結果を得た方には認定証を交付するほか、特に優秀な成績を収めた方および団体は表彰を行っています。

昨年度の特許検索競技大会2015は、平成27年9月5日（土）に東京・大阪・仙台の3会場で同時開催し、ベーシックコースとアドバンスコースを合わせて326名が参加しました。





があります。知財系のコンサルができて弁理士資格を持っているということで声がかかったのだと思います。

【向後】それは強みですね。両方の資格を持っていないとなかなかできませんからね。

【尼崎】経営に資する知財活動をしているかどうかという観点で見ないといけないので、例えばちゃんと収益が上がっているかを数値で出さないとイケないですし、そうすると財務の知識が必要になってくるので中小企業診断士としての知識が生きてきます。弁理士の資格だけですと、そういった面ではなかなか難しいですね。

【向後】なるほど。そういう面でも確かに相乗効果がありますね。企業と話す場合も両方の知識があることがかなり重要になってきますね。クライアントから一番期待されている部分はこういったところですか。

【尼崎】私は弁理士でもあるということもあり、例えば侵害調査の結果を踏まえて更に侵害かどうかの判定をすることで求められますね。これは比較的頻繁にやっていることで、例えばシステム開発会社が開発したシステムの侵害調査を何度か行いましたが、調査の後、侵害の可能性を見ながら設計変更のところまでアドバイスを求められることがあります。

【向後】そのシステムをどちらの方向に変更すべきかなどのアドバイスを求められるわけですね。

【尼崎】そうです。打ち合せの場には技術者の方もいますが、技術者の方は知財の知識をあ

まり持っていないので、請求の範囲にはこういう要件が書かれていますよ、でもこれを書いていないですね、などと説明しながら、設計変更の内容も含めて打ち合わせを進めています。

【向後】そういう仕事はよほど経験を積んで、顧客の求めるものをしっかり聞いて、しかも、他社の動向も捉えて考えて行かないとできない仕事ですね。

【尼崎】顧客から(アドバイスに必要な情報を)引き出すというのでしょうか、ヒアリング力が求められる仕事ですね。

【向後】自分で特許請求の範囲を書いているというのが強みですね。技術者が特許請求の範囲を読み解くというのは至難の業ですから…。研鑽と経験を積まないといけないことですね。

【尼崎】そうですね。そのお客さんとは毎回、侵害調査をし、その結果を踏まえて、その後設計変更まで検討するというのをやっているの、先方もだんだん知財の知識が蓄積していつているのが分かります。自身で簡単な調査もできるようになったようです。

【向後】やっているうちにだんだん面白くなって興味を持つようになるのでしょうかね。IPCCのサーチャーにも同じような人がいます。ご自分の事務所の将来像などはどのように考えていますか。

【尼崎】なかなか難しいところですが、以前の勤務先で数名のフリーランスの調査員と仕事をしたことがありました。その方々は外注で調査をしているのですが、色々な企業からの仕事も受けていて、一匹オオカミだけど情報だけで様々な企業を相手に仕事をしている姿が格好いいなと思い、そういう人達に憧れを持ちました。ですので、今の事務所を組織として大きくするといったことは、現段階では考えていません。

【向後】調査会社として大きくして、自分がオーナーになるという経営的なことよりも、サーチャーとしての道を究めたいという欲求の方が強いということですか。

【尼崎】サーチを更に昇華させたいというのでしょうか。調査会社は山ほどあり、情報の単価もだんだん安くなって来ています。加えて、将来的には人工知能が調査するのではないかという話もあり、ただ調査だけをやっているのでは厳しい時代なのかなと思うのです。その意味

で、この先自分が何をすべきかを模索しているところ。無効調査の鑑定や侵害調査の判定などで、専門的な助言をするといった付加価値をつけることは今でもやっていますが、更に別のことがやりたいという思いもあります。その1つが中小企業診断士の資格を使った経営的なアドバイスで、こちらもやりたいと考えています。

【向後】そこに知財のエッセンスを加えて、ということですね。中小企業の中には、規模は追及しなくても、ある技術に特化して、この技術に関しては世界でトップになるなどの生き方もあるわけで、そういう場合はやはり知財に裏打ちされないと経営は厳しいでしょうね。そういう会社を縁の下の力持ちとして支えるということでしょうか。

【尼崎】そうですね、中小企業の場合は社長さんと直接話ができまして、そういう社長さんはアクティブでレスポンスも早いので、やっていると面白いと感じています。

【向後】中小企業の経営者は全部自分で判断して即決しないと会社が成り立たない。その辺は大企業で何回も稟議を回し、それでも判断が付きかねるというようなところと比べれば、やはりスピードが第一でしょうね。

【尼崎】パッと決断して、じゃあ特許出願しようかとその場で決めたりできるのも中小企業の社

長さんならではの経営判断ですね。

【向後】弁理士や中小企業診断士の資格がおりになる上、これまで多くの経験を積まれた尼崎さんだからこそできることかもしれません。本日伺ったお話しでは、特許調査人材に求められる今後の姿は、企業経営のかゆい所に手が届く、知財のスペシャリストなのでしょうね。

【尼崎】そうなれると良いですね。

【向後】最後に、若手サーチャーやこれからサーチャーを目指そうとしている方に一言アドバイスをお願いします。

【尼崎】私は、サーチャーという仕事は軍師のようなものだと考えています。決して派手ではなく裏方的な役割なのですが、情報を得てそれを経営者等に伝えて、その情報1つでガラッと戦況が変わるといった重要な役割だと思います。企業の場合、例えば侵害調査で漏れがあるとビジネスが立ち行かなくなるということもあります。特許調査は企業にとってとてもインパクトの大きい仕事なので、是非若いサーチャーさんたちもやりがいを感じていただきたいと思います。若い人ほどインターネット検索などに慣れていると思うので、是非サーチの勉強をして日本に貢献していただきたいと思います。

【向後】尼崎さん、本日はお忙しいところ長時間お付き合い頂き、ありがとうございました。

(対談日：平成28年7月26日)





一般財団法人 工業所有権協力センター
Industrial Property Cooperation Center

〒135-0042 東京都江東区木場一丁目2番15号
深川ギャザリア ウエスト3棟

TEL 03-6665-7850

URL <http://www.ipcc.or.jp>